



漆芸家の古原秀樹氏(左)と飯田慶雄理事。
右後方は刀剣組合寄贈の漆室(右)、左は石蔵建築寄贈の漆室

能登半島地震被災地の復興支援に向けて

NEWS, TOPICS, INFORMATION, OPINION & EDITORIAL

刀 剣 界

2024.10.15 No.70

発行人 深海 信彦
発行所 全国刀剣商業協同組合 編集委員会
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-18-10
新宿スカイプラザ1302
TEL:03(3205)0601 FAX:03(3205)0089
https://www.toukenkumiai.com/

第70号編集担当 赤荻 稔 飯田 慶雄
伊波 賢一 大平 岳子 嶋田 伸夫 清水 儀孝
生野 正 新堀 孝道 瀬下 明 土子 民夫
綱取 謙一 土肥 豊久 服部 暁治 深海 信彦
松本 義行 冥賀 吉也 持田 具宏 吉井 唯夫

一月一日十六時十分、石川県能登半島を中心に大きな地震が発生しました。地震の規模はマグニチュード

ド七・六、輪島市と羽咋郡志賀町で最大震度七を観測、日本海沿岸の広範囲で津波が観測されたほか、土砂災害、液

状化現象、家屋の倒壊、火災が相次ぎ、交通網も寸断されるなど、奥能登地域を中心に北陸地方の各地に大きな被害をもたらしました。

輪島市の観光名所「朝市通り」では、地震により発生した火災で二百棟以上が焼け、一帯のおよそ五万平方メートルが焼失しました。こうした事態に、内外から被災地の復興を支援する声が上がっており、広がってまいりました。

全国刀剣商業協同組合では、東北大地震の際の支援事例なども勘案しつつ、この度の具体的な支援策の検討を重ねました。

わが国有数の漆芸の産地として知られる輪島の地には、多くの塗師がいて、漆芸工房が軒を連ねていました。刀剣業界にも縁のある作家や職人たちは幸い、家族を含め無事

は確認されたものの、家屋の崩壊などにより道具類が全て失われ、一切の活動ができない深刻な状況にあるとの報告が届きました。

これを受けて、当組合では支援策として直ちに、漆芸の仕事に不可欠である漆室(塗師風呂)の寄贈を決定し、専門の業者である石蔵建築に製作発注しました。

ご承知のように、漆製品は限られた条件の下でないと完成しません。その乾固に最適な条件は、温度二〇〜二五℃、湿度七〇〜八〇%であると言われます。その環境を保つのが、精緻に設計された漆室です。

五月十日、加賀市に所在する石蔵建築工場において、当組合を代表して飯田慶雄理事から、漆芸家・古原秀樹氏らに完成品の贈呈が行われました。



今回の寄贈支援を仲介された鞘師の森井敦央氏

震災直後から幾度も能登に足を運び、塗師さんたちの支援に当たってこられた当組合賛助会員で鞘師の森井敦央氏にも立ち合ってもらいました。

なお、今回の製作に当たった石蔵建築におかれては、当組合の趣旨に特に賛同を頂き、別に小型の組立式漆室を寄贈されました。

関係者の皆さんからは「素

晴らしい出来で、これからまた仕事を頑張っていけます」との力強い言葉を聞くことができました。後日、塗師の北村竜治氏からは丁寧なお礼の書簡も頂きました(別掲)。

その後、九月下旬には能登地方を記録的な豪雨が襲い、特に輪島市・珠洲市・能登町などでは重ねて甚大な被害に見舞われました。

この度は、立派な漆師風情の漆室を賜りまして誠に有難う御座います。四十一年近く続けてきた仕事を、今回の災害で仕事場や道具、材料がすべてを失ってしまいました。好きな仕事をしたいが、このまま諦めて振替しようかとも思いました。しかし、思いをよらされた皆様のおかげで諦めるはまた早、と背中を押された思い、継続することを決意しました。

私は漆色しか出来ません。その漆色をお客様に少しでも感動を与えられたら、喜んでいただけたいと思っておりました。これからもその思いを失くさず、より一層頑強で良い仕事をしたいと思っております。

本来なら直接お会いしてお礼を申し上げるべきですが、今回はお手紙にてお礼いたします。

重荷を担い、この度は、ご支援いただき誠にありがとうございました。

北村竜治

北村竜治氏からのお礼状

日本刀の
名品・名刀を販売
店主 小暮 昇一
〒529-1131
滋賀県愛知郡愛荘町香掛80-11
TEL 0749-421273
携帯 090-31621764
http://www.goushuya-nihontou.com

代表
田中 勝憲
古銭・切手・刀剣 売買 評価鑑定
(株)城南堂古美術店
〒153-0051
東京都目黒区上目黒四-1-10
TEL 03-371-0167
03-371-0167
FAX 03-371-0167

刀買取委託
e-sword
〒350-1115 埼玉県川越市野田町1-4-19 1F
TEL 049-246-6622 FAX 049-246-1407
刀通販サイト
www.e-sword.jp
日本刀 イーソード 検索
mail:info@e-sword.jp
イーソード
(株)e-sword 平子誠之

刀剣・書画・骨董
和敬堂
土肥豊久・土肥富康
〒940-0088 新潟県長岡市柏町1-2-16
TEL 0258-33-8510
FAX 0258-33-8511
http://wakeidou.com/

刀剣 高吉
古名刀から現代刀、御刀のことならお任せください
連絡先 090-8845-2222
代表者 高島吉童
東京都北区滝野川7-16-6
TEL 03-5394-1118
FAX 03-5394-1116
www.premi.co.jp

「大刀剣市2024」出店一覧

Table with 3 columns: No., 氏名, 屋号. Lists exhibitors for the 'Daikoban 2024' event, including 1 深海 信彦 (銀座 長州屋) and 35 松本 義行 (美術刀剣 松本).

Table with 3 columns: No., 氏名, 屋号. Lists exhibitors for the 'Daikoban 2024' event, including 36 村上 竜太 (ギャラリー翠篠) and 69 日本甲冑武具研究保存会.

数字はブース番号

「大刀剣市2024」は 11月2・3日に開催

「大刀剣市」の進捗状況です。今年の参加店舗数は六十九。開催日数は昨年を継承し二日間。十一月一日は搬入日で、同二日が十一月十七時、三日が十一月十六時の開催となります。今年も休憩室が三階にも設けられ、リフレッシュに利用できます。昨年、唯一の問題点とされた初日オープン時の入場者の行列は、今年も会場周辺の東京美術倶楽部で当日一・二階の利用がないため、エレベーターでの入場と併せ、階段の利用が可能で、三階・四階両会場に受付を設け、これらにより混雑は軽減されています。この原稿を書いている時点ではまだ課題を残していますが、スムーズさを考慮し、バーコードまたはQRコード入場も視野に入れています。また、お弁当販売も昨年の出店業者三社に依頼し、それぞれ色よいお返事を頂きました。大刀剣市でのリーダーシップ、つまり集団の管理というものは、参加者にルールを厳格に適用し運営すれば、乱れは生じません。かつては組織というものが主であり、個は従でした。しかし、社会の成熟につれ、個が主、組織が従

が当たり前になりつつあります。「組合」はまさしく個が主であるべき姿のほうです。大刀剣市は六十九もの個の集合体です。それでも、その管理の必要性は求められます。ルールとマニュアルは必要最低限にとどめていきます。不自由を感じないでいただきたいと思えます。球技などのスポーツの国際選手権でよく聞く言葉「ワンチーム」。これはチームに貢献する一メンバー、一メンバーを支える全員と双方の立場を表しています。私たち刀剣組合もこの精神で、一年で一番大きいこのイベントを無事に乗り越えていくことはありませぬか。(実行委員長 網取譲一)

組合こよみ (令和6年4~9月)

- 4月16日 東京美術倶楽部において第38期第1回理事会を開催。出席者、深海理事長・伊波副理事長・土肥副理事長・服部副理事長・清水専務理事・嶋田常務理事・網取常務理事・赤荻理事・飯田理事・大平理事・生野理事・新堀理事・瀬下理事・松本理事・冥賀理事・冥賀監事・逸見税理士
5月13日 瀬下理事と冥賀理事が組合事務所において刀剣の評価査定
17日 東京美術倶楽部において第37回通常総会を開催。出席者69名、委任状45名、合計114名
17日 東京美術倶楽部において交換会を開催。参加者77名、出来高126,702,000円
21日 嶋田常務理事が組合事務所において刀剣の評価査定
21日 深海理事長と嶋田常務理事が全国中小企業団体中央会を訪問
6月8日 服部副理事長と清水専務理事が刀剣評価査定のため出張
13日 深海理事長・服部副理事長・嶋田常務理事が銀座長州屋において刀剣の評価査定
14日 網取常務と生野理事が組合事務所において刀剣の評価査定
16日 東京美術倶楽部において第2回理事会を開催。出席者、深海理事長・伊波副理事長・土肥副理事長・服部副理事長・清水専務理事・嶋田常務理事・網取常務理事・赤荻理事・飯田理事・大平理事・新堀理事・生野理事・瀬下理事・大西監事・冥賀監事
19日 服部副理事長が組合事務所において刀剣の評価査定

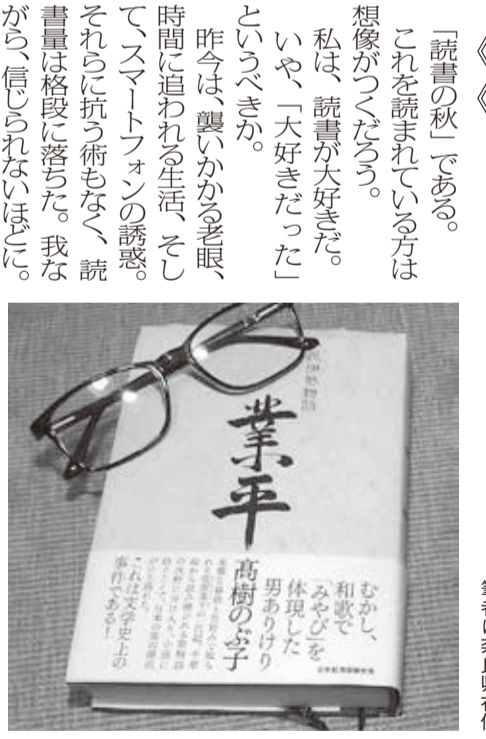
- 27日 松本理事と持田理事が組合事務所において刀剣の評価査定
28日 刀剣評価鑑定士の資格更新手続き開始
7月30日 服部副理事長と清水専務理事が組合事務所において刀剣の評価査定
8月6日 組合事務所において大刀剣市カタログの編集委員会を開催。出席者、嶋田常務理事・網取常務理事・大平理事・持田理事・冥賀監事・服部一隆氏・土子氏・東京平版(株)遠山氏
9日 日本美術刀剣保存協会主催2024年度現代刀職展の表彰式に伊波副理事長が出席。取材は瀬下昌彦氏
23日 服部副理事長が組合事務所において刀剣の評価査定
9月2日 清水専務理事が組合事務所において刀剣の評価査定
12日 産経新聞社に大刀剣市の後援を依頼
13日 組合事務所において大刀剣市カタログの編集委員会を開催(初校)。出席者、清水専務理事・嶋田常務理事・冥賀監事・服部一隆氏・大平将広氏・土子氏・東京平版(株)遠山氏
16日 東京美術倶楽部において『刀剣界』第70号編集委員会を開催(初校)。出席者、伊波副理事長・服部副理事長・清水専務理事・嶋田常務理事・大平理事・生野理事・持田理事・土子氏
27日 伊波副理事長・清水専務理事・飯田理事が組合事務所において刀剣の評価査定

【訃報】濱崎善弘氏
当組合の組合員、濱崎善弘氏が八月二十一日に逝去されました。享年八十歳。ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

【瀬戸美幸様】
当組合の組合員、瀬戸泰二氏のご合室美幸様が八月二十六日に逝去されました。享年六十一歳。ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

【訂正】
『全刀商』第33号の広告中、月山貞利氏の住所表記に誤りがありました。正しくは「奈良県桜井市大字茅原228-8」です。お詫びして訂正します。

折々の書と生きる



「読書の秋」である。これを読まれている方は想像がつくだろう。私は、読書が大好きだ。いや、「大好きだった」というべきか。
昨今は、襲いかかる老眼、時間に追われる生活、そして、スマートフォンの誘惑。それらに抗う術もなく、読書量は格段に落ちた。我ながら、信じられないほどに。
若いころは、重症の活字中毒だった。暇さえあれば、読書をしてきた。歴史、日本の古典文学、小説、エッセイ、伝記……。
一冊の本の中で、私は語り、旅をし、恋をして、時には闘っていた。「想像の翼」を授けられていたのだ。
今や、そんな時間や感覚を懐かしく思い、また読み始めている。息子の習い事の待ち時間、仕事帰り、ボチボチとゆっくりと。高樹のぶ子著『小説伊勢物語 業平』、『与謝野晶子訳 源氏物語』……。

もう、あの頃のような全速力で食らい尽くすような読み方はできない。でも、古馴染みの友として、優しく寄り添ってくれるような、そんな気がする。
これからも、よろしくお付き合いいただきたいと思います。

去る八月二十一日、濱崎善弘氏が鬼籍に入られた。
何もわからない頃から親切にしていたが、今も私を支える言葉を遺してくれた。
思っているうちに思い出した。鰻を馳走してくださった約束をしていたが、果たせずに終わった。濱崎さん、私がそちらに行ったら、馳走してくださいね。特上。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

銀座日本刀ミュージアム 泰文堂
〒104-0061 東京都中央区銀座6-7-16 岩月ビル2階
TEL 03-3289-1366 FAX 03-3289-1367
http://www.taibundo.com

美術日本刀・鐔・小道具・甲冑
日本の伝統文化を彩る JAPAN SWORD CO., LTD.
(株) 日本刀剣
伊波賢一 Ken-ichi Inami
〒105-0001 東京都港区虎ノ門3-8-1
TEL 03-3434-4321 FAX 03-3434-4324

大阪刀剣会 吉井唯夫
大阪市中央区日本橋二丁目一
TEL 06-6631-1111 FAX 06-6644-1546

刀剣・小道具・甲冑武具
飯田高遠堂
代表取締役 飯田慶雄
〒161-0033 東京都新宿区下落合3-17-33
TEL 03-3951-3312 FAX 03-3951-3615
http://www.iidakoendo.com

アオバ企画(株) 高橋一
〒130-0012 墨田区大平四一九二-1308
TEL 03-3621-1111 FAX 03-3621-1151
aobak@pj8.so-net.ne.jp

ブック・レビュー BOOK REVIEW

『享保名物帳』と將軍吉宗の実像

『名物刀剣 武器・美・権威』

酒井元樹著 定価一九八〇円(税込み) 吉川弘文館

ふとしたことから思いもよらない発見をする。そういうことは誰しも少なからず経験しているのではなからうか。本書の著者・酒井元樹氏もそんな経験をしている。

酒井氏は二〇一二年秋、勤務先の東京国立博物館で、気になる短刀と出会った。地鉄と刃文が美しい作……しかし、なぜかほとんど履きださなかった。酒井氏はふと気になって『享保名物帳』を開いてみた。するとその短刀、何と尾張徳川家伝来の名物岡山藤四郎吉光と銘・長さ・刀身彫刻、すべてが一致するではないか！ 大発見である。

酒井氏はこれをきっかけに『享保名物帳』に関心を持ったのだという。

『享保名物帳』、刀剣界では知らない人がいないほどの有名な文献である。だが、酒井氏によれば、これほど謎の多い史料もまた珍しいという。何しろ原本が今のところ確認されていないし、写本はいろいろあり、しかもおのおのが若干異なっている。酒井氏はそれらを分析・整理し、主要な写本A類・B類・C類に分け、その成り立ち、写本を形成していった人々、そして当時の人々の刀剣に対する見方接し方、とりわけ名物刀剣に対する、当時の武家における意識……それらを酒井氏は博物館の人らしい視点と研究方法で浮かび上がらせている。



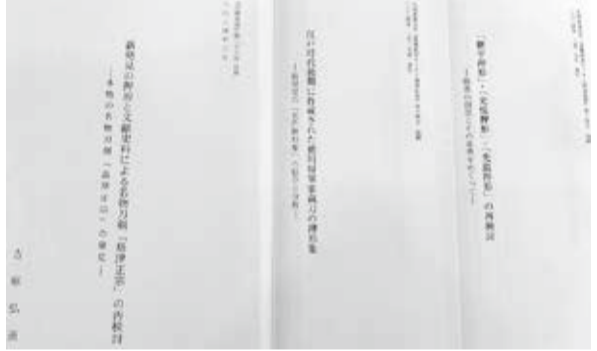
酒井氏の名物帳の研究で、八代將軍吉宗の特異な性質も明らかになっている。吉宗は大名家所蔵の刀の号の由来や歴史的由緒のある甲冑について、家臣を派遣し、調査に当たっているのである。

家康をはじめとして將軍や大名たちの、刀や武器・武具への関心はもろろ高かったはずである。だが、わざわざ他家の武器・武具の伝来・来歴・名前の由来などの調査に執念を燃やした吉宗のような人は、当時、珍しかったのではなからうか。

そういえば、以前、吉宗が文化政策にも力を入れ、紅葉山文庫の書籍・文献の整理にも取り組んでいたとの研究に触れた(上條静香「徳川將軍家のアーカイブズ、紅葉山文庫―吉宗政権期を中心に―」『学習院史学』55号)。吉宗はやはり特別な將軍だったわけで、名刀の来歴を明らかにする調査、そして本書では取り上げられてはいなかったが、大名の領地の有力刀工の作品を提出させて審査し、最優秀作を選び、その刀工に御前打ちをさせたのも、吉宗ならではこそ、なのである。

本書は読みごたえがある。一読をお勧めする。ただし、刀工の逸話、刀の見所、鑑定の要点などは一切書かれてはいない。刀の本というより、『名物帳』を素材にした歴史の本。いかにも吉川弘文館好みの一冊ではある。

実のところ、この本を読む少し前『享保名物帳』と刀に関する衝撃的な論文を読んだばかりだった。本書の参考文献にもお名前が見える吉原弘道教授(九州産業大学)の『七隅史学』第26号の論文。題がすごい! 『新発見の押形と文献史料による名物刀剣『島津正宗』の再検討―本物の名物刀剣『島津正宗』の発見―』である。



吉原弘道氏の各論文表紙

『享保名物帳』所載の島津正宗は、京都国立博物館所蔵の正宗であると新聞でも取り上げられた。発表したのは「新進気鋭の刀剣研究家」としてテレビや雑誌で大人気だったS氏。だが、吉原先生の研究により、本物の島津正宗は、刀剣ワールド財団所蔵の正宗ということが明らかになった。

しかもS氏が根拠とした『継平押形』は、吉原先生の研究によれば、そもそも江戸中期の書ではなく、後期に成立した偽書だということ。と京都国立博物館蔵の正宗は一体……吉原先生の論考は、九州産業大学基礎教育センター『研究紀要』14号の論文とともに三部作である。ご興味のある方はぜひお読みください。(小島つとむ)

■酒井元樹(さかい・もとき) 一九八〇年、千葉県生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了。東京国立博物館主任研究員。主要論文「名物」岡山藤四郎について(『鎌倉時代における刀身彫刻の研究』刀剣鑑賞の歴史)「いわゆる『享保名物帳』に関する一考察 島根・和銅博物館保管『名物扣』影印・翻刻」

『山城物刀剣図譜』

資料紹介

戦中に開催され、戦後に刊行された名刀集

表題資料を入手したので、皆さまにご紹介したいと思います。戦時中の刀剣界を知る一助になれば幸いです。

平成三十年秋に京都国立博物館において特別展「京のかたな」が開催され、当時の刀剣ブームも背景に大いに賑わったことは記憶に新しいところです。館内はもちろん、京都駅から京博まで多くの人が並んだ時間もありません。

その図録の主要参考文献(書籍の二番目)に、恩賜京都博物館編纂になる『山城物刀剣図譜』(一九四六年)があります。先日、都内の某刀剣店の展示即売会にこの図譜の所載刀と原本が出品され、入手しました。お店では所載刀が主で図譜は副の扱いでしたが、個人的にはこの図譜が主になりました。

この図譜は昭和十八年十月十五日日から三十一日まで同博物館で開催された「山城物刀剣特別展」を記念して上梓されたもので、戦後の二十一年六月に定価二百円で京都印書館から発行されました。

図譜の序文によれば、この展覧は「……当館にては時代の要求を察し、我が郷土に於いて発達した所の山城物の顕彰を期し、併せて斯界発達の参考に供する為」とあります。太平洋戦争中にこのような特別展覧が恩賜京博で開催されたことが驚きです。さすが京都です。



『山城物刀剣図譜』の表紙と奥付

です。

図譜は序、山城物刀剣の歴史、山城物刀匠史、出陣刀剣の略説(恩賜京博鑑査員の松田恒二郎が執筆)、出陣刀剣の写真と押形で構成されるB4判・二三〇ページを超える大著です。所載品は菊御作を筆頭に、三条、栗田口、来、了戒・信国、長谷部、平安城、達磨、埋忠、堀川、三品と続き、明治二年紀の天龍寺正隆まであります。合計九四点のうち、当時の国宝一四点、重美二点が所載されています。

文化財保護法は昭和二十五年八月の施行ですから、国宝は今でいう旧国宝であり、重文・特重・重要はありません。出陣は各地の神社仏閣から二六六、帝室博物館から八六、個人から六〇点です。個人では細川護立氏、河瀬虎三郎氏のお名前もあります。ちなみに「京のかたな」展では合計一七〇点のうち、国宝一九点、重文六一点が出展されました。戦中という時代背景も考慮すれば立派な特別展覧であったと思います。

戦後にこの図譜が発行され、日本刀を武器と考えたGHQの刀狩りを経て美術刀剣の概念が成立し、今われわれが日本刀を売買・所有できる礎の一助になったのはと愚考する次第です。あらためて先人・先輩に感謝です。

本展に出陣された国宝は次のとおりです。三条、吉家、栗田口国光、栗田口吉光三三、綾小路、来国行、来国俊、来国光、来国長、出羽大掾国路三三の四点です。国路は八坂神社蔵で徳川家綱の寄進によるもの。祇園社御太刀の裏銘ある長大な太刀です。

(注) 昭和十八年十月には出陣学徒壮行会が秋雨の明治神宮外苑で挙行されました。

旅のつれづれに 14 篠山城址を見に行く

「篠山城」と言っても、知らない方が多いことでしょう。小生も知りませんでした。しかし、所在する丹波篠山市は京都市の西隣で大阪・兵庫の関西二府県にも隣接しており、ベッドタウンとしての顔も持っています。

ただ今回は、いつもの鑑定会の閑な時間帯に、お城の外側にある城下町や商家群をゆっくり拝見するというものではなかったのです。実は中高時代の仲間四人で旅で、その一番の目的は、ジビエ料理の猪鍋を頂くことでした。そこに、篠山城址がまさにあってくれた、ということ。

篠山城は慶長十四年(一六〇九)徳川家康の命令によって築城された天下普請の城です。縄張り(設計)は、先例が数多ある築城名人・藤堂高虎。

家康は関ヶ原の合戦に勝利し、江戸幕府を開いたが、いまだ大坂城には豊臣秀頼が健在であり、豊臣恩顧の大名たちは強い勢力を保ったままだった。家康は、豊臣方の財力を削ぐとともに、大坂城を包囲網の拠点の一つとして、山陰道が通る要衝の地である篠山に城を築くことを決めた。築城には丹波以西の十五万国の外様大名から延べ八万人もの人夫を出させ、着工から半年で完成させた。ものすごいスピード築城である。

また初代城主として、家康の息子ではないかと言われている松平



篠山城の全容

康重を入城させた。康重は大坂冬の陣・夏の陣に篠山城から出陣している。篠山城の築城は、まさに家康の思惑通りの結果をもたらしたのである。

篠山城は笹山という小山を利用した平山城であり、別名を桐ヶ城と言う。天守台のある本丸を中心とし、二の丸、内堀、三の丸、外堀を配置し、外堀の三方には馬出を設けている。この三方に馬出というのが藤堂高虎の狙いだったのだろう。城郭は一辺約四〇〇メートルと規模はさして大きくはないが、外堀の最大幅は約四五メートルと破格である。何しろ大坂城の十分の一程度の広さなのに、大坂城の一番狭い外堀幅約四〇メートルをしのぐのだから(最大幅は二二〇メートルと伝えられる)。三方馬出同様、実戦、とりわけ防御能力の強化に徹した城であったようだ。

城郭の中核となる天守は、用材を準備しながら築かれることはなかった。その理由としては、家康が「天守は人目立って敵方の狙いになるだけである」と命じたなど諸説あるが、大坂夏の陣以後、天守付きの城として築城されたのはわずかに五城。そのうち三城は幕府の方針で築城したものであり、既に天守を造ること自体が不要になりつつあったのかもしれない。

そう考えると、大坂夏の陣から三十七年後に江戸城が全焼した折、家康の孫である会津藩初代藩主・保科正之が天守再建に反対したのもむべなるかな、と思うのですが、考えすぎでしょうか。

とにかく、たまたま篠山城址を見に行くことができて良かったです。猪鍋も最高ですよ。(持田具宏)

刀 剣 界

甲冑の話題

(二社)日本甲冑武具研究保存会

21

小札について

今回は、日本甲冑の構成要素を知る上で欠かせない「小札」についてご紹介させていただきます。

小札とは革や鉄でできた縦長短冊状の小さな板で、古代・中世のユーラシア大陸で使用された甲冑にも多用されており、日本では平安時代前期から室町時代末期まで、この小札を用いた甲冑が主流をなします。

小札を用いた甲冑は鉄板を矧ぎ合わせた鎧などに比べて伸縮性に優れ、馬上で大きく腰を捻る際や両手で弓を引き絞る際に着用者が

動きやすいため、多くの騎馬民族が好んで使用しました。

小札を横に縫い重ねたものを「小札板(札板)」と呼び、威糸(甲冑に使用される組紐)で小札板を下に向けて縫い連ねることで甲冑を構成します。胴に関しては胸や腹部を覆う「長側(衝胴)」(図1参照)に分かれ、その他各所についても小札板を以て構成されたものが大多数を占めます。

小札の主な種類とそれぞれの構造について、以下でご紹介します。

①本小札

最も多く見られる小札の種類で、下半分に八孔空いた「下緘穴」を章紐などで横に縫い連ね(これを下緘あるいは札緘と言います)、上半分の「緘の穴」「毛立の穴」に威糸を通すことで上下の小札板を連結します。下緘の際は本小札同士が横に半分重なり合い、実質二重となるため、革製であっても堅牢です。革製の小札と鉄製の小札を交互に縫い連ねた小札板を「一枚交」と呼び、伸縮性と頑丈性を兼ね備えるためのさまざまな工夫が見て取れます。

②伊予札

本小札に比べて小札同士の重なりが少ないため、小札板を製作する際に少ない枚数で仕立てることが出来ます。伊予札を縫い連ねたものを「縫延」と呼ぶこともあります。伊予札を用いた「伊予佩楯」などにも見られます。また伊予札上端をさまざまな形に彫る、あるいは盛り上げることが多く、小札頭(小札上端のこと)の形によって「矢筈頭」「碁石頭」などと呼称します。(図2参照)

③板札

安土桃山時代切りから鉄砲に対

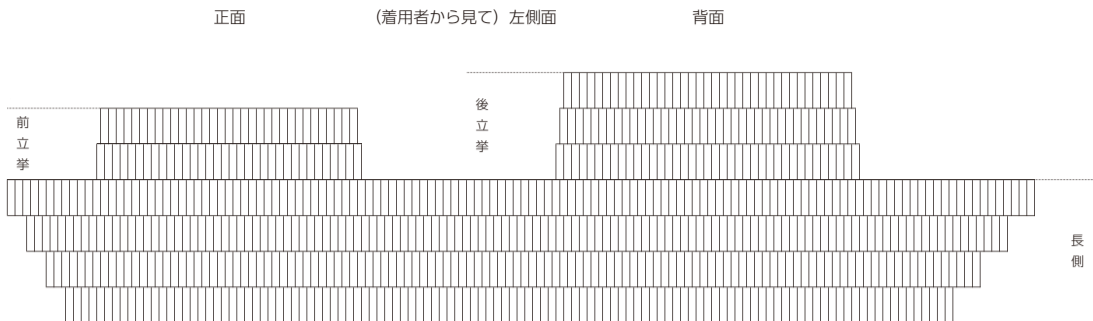


図1

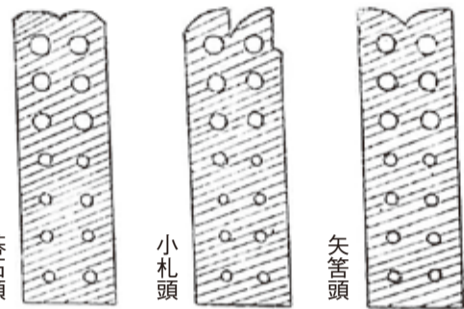


図2(山上八郎著『日本甲冑の新研究』上から転載)

日本刀・刀装具 販売・買取

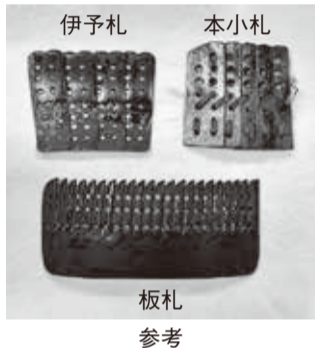
創業38年 株式会社 美術刀剣 松本

代表取締役 松本義行

Tel.03-6456-0889

東京西葛西店/東京都江戸川区西葛西6丁目13-14丸清ビル3F

刀剣松本 検索



参考

NEWS & TOPICS 上杉謙信ゆかりの上越市が「山鳥毛」を借用展示へ

戦国武将の上杉謙信の佩刀と伝わる国宝の太刀「山鳥毛」を、ゆかりの深い新潟県上越市で展示したいと、九月十二日、上越市の関係者が刀を所有する岡山県瀬戸内市を訪れ、借用を要望した。

瀬戸内市役所を訪ねたのは、上越市の小田基史副市長らで、武久頭也瀬戸内市長に、「山鳥毛を謙信公のふるさとで展示するため借用したい」という中川幹太上越市長からの親書を手渡した。上越市では、「謙信公祭」が来年で百回

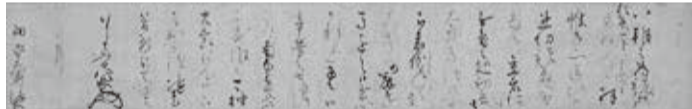
目を迎えるのに合わせ、展示を検討しているという。山鳥毛は岡山県内の個人が所有していて、初めに上越市が購入を検討したものの所有者と折り合いがつかず断念、その後、瀬戸内市が五億円で購入した経緯がある。瀬戸内市の武久市長は「上越市の皆さまには山鳥毛を購入する際に応援していただいた。展示に協力したい」と話しており、近い将来、上越市民の期待が実現することになりそうだ。

NEWS & TOPICS 永青文庫で室町幕府滅亡直前の織田信長書状を発見

公益財団法人永青文庫には、細川藤孝を初代とする大名肥後細川家に伝来した数多くの重宝が保管されている。中でも、織田信長の発給文書五十九通は特に貴重なもので、すべてが国の重要文化財に指定されている。

一昨年、熊本大学永青文庫研究センターとの共同調査によって、永青文庫の収蔵庫から六十通目の信長発給文書が発見された。検討の結果、いわゆる「室町幕府の滅亡」の直前に当たる元亀三年(一五七二)八月十五日に、信長が藤孝に出した未知の書状であることが判明した。

本書状には、將軍足利義昭の京都没落の背景に関わる貴重な情報が含まれているという。信長が義昭とともに構築した幕府体制が五年後に崩壊した主要因が、義昭側近衆と



信長との対立にあったこと、側近衆の中にあつて細川藤孝ただ一人が信長と同じ、義昭軍兵の半年も前から畿内の領主層を信長方に組織する活動を続けていたこと、など。

NEWS & TOPICS 日刀保たたら村下の木原明さん「お別れの会」開かれる

日刀保たたら村下で選定保存技術保持者の木原明氏は去る六月二十二日に逝去された。享年八十八。その「お別れの会」が九月七日、島根県奥出雲町の横田コミュニティセンターで関係者約百二十人が参加し営まれた。

木原さんは昭和二十九年、日立製作所安来工場(現アロテリアル)に入社。五十二年から日刀保たたらに転業し一貫して携わってきた。六十一年に選定保存技術保持者に認定され、六十三年に村下に就任、今年四月に勇退するまで後継者の育成に尽力してきた。

お別れの会は、奥出雲町の系原保町長が開会の挨拶を述べ、次いで、全日本刀匠会会長の宮入小左衛門行平刀匠が長年の功労に感謝の言葉を述べた。

弔辞は、木原さんに三十年以上



在り日の木原村下と日刀保たたら

NEWS & TOPICS 「食の達人」を人間国宝に…文化庁が検討を開始

日本の「食の達人」を人間国宝(重要無形文化財保持者)に…。そんな新たな表彰制度作りを検討する文化庁の専門家会議が立ち上がり、九月二十日に開催された。専門家会議には日本ソムリエ協会会長の田崎真也さんらが参加し、来年春ごろまでに制度の名称や評価項目など、具体的な制度設計に向けた方向性を取りまとめる予定だという。

昭和二十五年制定の文化財保護法に基づく人間国宝制度は、歌舞伎や能などの芸能分野と、陶芸や日本刀といった工芸分野が対象。食文化は含まれていない。

しかし平成二十五年に「和食」日本人の伝統的な食文化が国連教育科学文化機関(ユネスコ)の無形文化遺産に登録。二十九年成立の文化芸術基本法で、国が取り

組む施策として「食文化の振興」が明記されたことを受け、対象の拡大に踏み出す。優れた料理人や杜氏などの認定者には国が助成金を交付し、技術向上や後継者の育成を後押しする。

日本人の食生活の洋風志向が進み、若者を中心に「和食離れ」も指摘されている。文化庁は日本の伝統的な食文化の保護、継承のきっかけにもなると期待する。

刀剣業界の情報紙である『刀剣界』では、記事を募集しています。ニュースや催事情報、イベント・レポート、ブック・レビュー、随筆・意見・感想など、何でも結構です。写真も添えてください。組合員・賛助会員以外の方も歓迎です。ただし、採否は編集委員会に諮り、紙面の関係で編集させていただくことがあります。

イベント・レポート

公益財団法人日本美術刀剣保存協会「現代刀職展」表彰式
栄冠を獲得した現代の匠たち

去る八月九日、公益財団法人日本美術刀剣保存協会（酒井忠久会長、以下「日刀保」）主催の二〇二四年度「現代刀職展」表彰式が、第一ホテル両国において開催されました。

式典には、来賓として山田宏参議院議員（刀剣・和鉄文化を保存振興する議員連盟事務局長）、小林万里子文化庁審議官、高村正彦元外務大臣（日刀保名誉顧問）が臨席され、当組合から伊波賢一副理事長が出席しました。

表彰式は午後一時半から執り行われ、酒井会長の主催者挨拶に始まり、次に来賓の山田議員、小林審議官が祝辞を述べられ、その後、各部門の審査員が紹介され、審査会経過報告がありました。

応募総数は作刀の部三四点、研磨の部八五点、刀身彫の部四四点、彫金の部二〇点、白鞘の部七点、刀装の部六六点、柄前の部一四四点、白銀の部九点でした（無鑑査出品を除く）。

続いて授賞式が行われ、各部門の特賞授賞者に賞状と賞杯が授与されました（敬称略）。

○作刀の部

太刀・刀・脇指・薙刀・槍の部
〈高松宮記念賞〉清水達吉、〈薫山賞〉曾根寛、〈寒山賞〉加藤政也、〈日刀保会長賞〉森國利文、短刀・剣の部、〈薫山賞〉松川隆、〈寒山賞〉吉田政也、〈日刀保会長賞〉月山一郎

○研磨

鎬造の部、〈文部科学大臣賞〉倉田竜太郎、〈木屋賞〉大門健太郎（平造の部にて日刀保会長賞も受賞）、〈竹屋賞〉井上聡、〈千葉賞〉玉置城二（研磨平造の部にて薫山賞も受賞）、〈薫山賞〉

松尾清健、〈寒山賞〉松村壮太郎、〈日刀保会長賞〉菊池真修、平造の部、〈寒山賞〉真津仁彰、刀身彫の部、〈日刀保会長賞〉柏木幸治

○彫金の部、〈日刀保会長賞〉川島義之、○白鞘の部、〈日刀保会長賞〉森井敦央、○柄前の部、〈日刀保会長賞〉久保謙太郎

○白銀の部、〈日刀保会長賞〉三島幹則、そのほか、優秀賞・努力賞・入選など多くの方々が受賞されました。その後、審査員代表者による講評があり、作刀の部では河内道雄氏から、「作刀技術の向上が見られたが上位の作品と下位の差が大きくなり、下位の作品に不完全なもの多数あることから、基礎を学び直す意味で先輩方にもう一度しっかりと指導を仰ぐように」との指摘がありました。

河内審査員は毎年受賞者が書かれたコメントを楽しみにして、いて内容を読むたびに「一年間必死で作刀して出品してきたことが伝わり、職人として共感を覚え、五十年前の駆け出しの弟子生活のことを思い出して心を新たにしている。継続は力なり、高度な刀職技術を後世に伝えていくことがわれわれ刀職者の使命、今後も努力を惜しまないよう」と若い刀匠たちを激励されていました。

研磨の部では臼木良彦氏から、「研磨技術の向上は顕著で、特賞を受賞された方々はどれも甲乙つけがたいものばかりであったが、出品作の中

には、やはり下地の悪いもの数点あり、これは刀の根幹をゆるがすものなので一つ一つの作業を丁寧に行うように」との指摘がありました。

なお、今回は松村壮太郎研師が日刀保無鑑査に認定され、認定書が授与されました。筆者にとっては同世代の友人が無鑑査になったことは大変喜ばしく、刀剣界の将来にとっても明るいニュースになったと思います。

最後は受賞者を代表し、高松宮記念賞を受賞された清水達吉氏より答辞と、一月に発生した石川能登地震で被災された方々へのお悔やみと一日も早い復旧・復興を願う言葉が述べられ、滞りなく表彰式は終了しました。

閉会後は記念撮影が行われ、受賞者の皆さんの喜びに満ちあふれた笑顔で談笑されていたことが印象的でした。

受賞された皆さん、おめでとうございます。今後の活躍をお祈り申し上げます。（瀬下昌彦）



「現代刀職展」表彰式（第一ホテル両国）

第14回 新作日本刀 研磨 外装 刀職技術展覧会

公益財団法人日本刀文化振興協会（大野義光理事長）は、去る6月8日、第14回「新作日本刀 研磨 外装 刀職技術展覧会」の授賞式を、長野県坂城町「鉄の展示館」において執り行った。各部門・分野の受賞者は右の通り。



受賞者の皆さんと主催関係者

受賞者一覧

作刀・刀身彫刻部門

- 【作刀】 文部科学大臣賞・経済産業大臣賞 月山 一郎、公益財団法人日本刀文化振興協会会長賞 宮入 陽、長野県知事賞 上山 陽三、金賞第一席 明珍 裕介、金賞第二席 河内 一平、金賞第三席 根津 啓、銀賞第一席 富岡慶一郎、銅賞第一席 吉田 政也、銅賞第二席 森 光秀

研磨部門

- 観光庁長官賞 阿部聡一郎、公益財団法人日本刀文化振興協会会長賞 相良 雄一、信濃毎日新聞社賞 三浦 弘貴、金賞第一席 水田 吉政、銀賞第一席 藤川 二郎

刀装部門

【刀装具】

- 坂城町教育長賞 稲田憲太郎、金賞第二席 川上 登、金賞第三席 山下 仁義、銀賞第一席 Ford Hallam、銀賞第二席 長内 勝義、銀賞第三席 Marcus Chambers、銅賞第一席 Jeff BRODERICK、銅賞第二席 渋谷 充輝

【白銀】

- 金賞第一席 松本 豊、金賞第二席 杉山 英明、銀賞第一席 松川 泰典

【白鞘】

- 金賞第一席 古川 和幸、金賞第二席 田澤 敦嗣、銀賞第一席 佐藤ひなの、銀賞第二席 大平 善之

【柄巻き】

- 公益財団法人日本刀文化振興協会会長賞 遠山 和康、金賞第二席 平山 直弥、金賞第三席 山下 仁義、銀賞第一席 井上 裕隆

【鞘塗り】

- 坂城町長賞 小山 光秀

【拵】

- 銀賞第一席 佐藤ひなの

第8回「Sword Oshigata Art」

- 優秀賞第一席 長津 祐介、優秀賞第二席 三浦 弘貴、優秀賞第三席 吉野 弘美、優秀賞第四席 菅野 尚子、優秀賞第五席 下村 容子、佳作 澤田 康則、佳作 高橋 稔直



第17回 「お守り刀展覧会」 審査結果

- 〈総合の部〉 一席・特賞：文部科学大臣賞：上山陽三、二席・入賞：宮入 陽、〈刀身の部〉 一席・特賞：岡山県知事賞：上山陽三、二席・特賞：吉田康隆、三席・特賞：月山一郎、四席・入賞：宮入 陽、五席・入賞：吉田政也、六席・入賞：山下浩郎、佳作：安藤祐介、佳作：久保善博、佳作：宮入 陽

- 〈外装の部〉（代表者） 一席・特賞：上山陽三、二席・特賞：木下宗憲／艶々／橋本幸律、三席・特賞：根津 啓、〈研磨の部〉 一席・特賞：関山和進、二席・特賞：松尾清健、三席・特賞：各務玄太、佳作：阿部聡一郎、〈特別賞〉 プロテリアル賞：宗 正敏、駐日ポーランド共和国大使賞：月山一郎

NEWS & TOPICS
久保善博刀匠が日本鉄鋼協会「依論文賞」を受賞へ
この度、久保善博刀匠が、二〇二五年度の日本鉄鋼協会「依論文賞」を受賞することが決まった。昨年度の『鉄と鋼』誌に発表された論文「たたら製鉄の銑生成に及ぼす砂鉄中TiO₂濃度の影響」が認められたもの。
本賞は、大正四年（一九一五）の日本鉄鋼協会設立に尽力された東京帝国大学名誉教授依国一博士の功績を記念して制定されたもので、日本鉄鋼協会の論文誌『鉄と鋼』に掲載された前一年の論文を審査し、学術上・技術上最も有益な論文を寄稿した者に授与される。主な受賞理由は次の通り。
本論文は、たたら製鉄の原料である砂鉄の性状差に着目し、特に原料中TiO₂の重要性を世界で初めて示唆するものである。高いたららの操業技術力によって、安定した貴重な小型実験炉のデータが提供されている。その上で、原料条件による操業と製品性状の変化が緻密に調査され、従来は不純物と考えられていたTiO₂の重要な役割が、鉱物学的及び熱力学的な考察の上で解明されている。さらに、原料選鉱方法の変遷が、たたら製鉄法の栄枯に与えた影響をも技術史的に俯瞰されている。
同論文の研究結果は、日本古来のたたら製鉄法が持つ製鉄技術としての特殊性を明示するものであり、製鉄技術の理解に留まらず技術史など学術の発展に寄与するところも大きい。
着眼の独創性の高さと現代技術をもって、日本の古代技術の合理性に果敢に切り込む斬新な論文であり、依論文賞にふさわしいと判断できる。

登録刀剣類の過去と現在——今後の登録制度のあり方を考えて

警察庁保安課理事官 警視正 中島 治康

■筆者の中島治康氏は書籍『銃砲刀剣類等の取締り』の著者で、銃砲刀剣類所持等取締法(銃刀法)についての解説もしばしば発表されている。いわば銃刀法の権威であった。次掲は『警察時報』昭和五十三年一月号に所載の一文だが、銃刀法制定の経緯や背景、登録制度を取り巻く諸事情に詳しいので、警察時報社の了解の下に紹介する。なお、データは発表時点のものであることをお断りする。

① 登録を受けた場合

このうち前二者については当然のこととして理解されるが、「登録を受けた場合」については、割り切れない感じを持つ人が多い。行政上「登録」とは、特定の法律事実又は法律関係の存在を確認する行政行為であり、この場合は、美術品として価値のある刀剣であることを公の権威(登録審査員の鑑定結果)をもって確認する行為である。したがって、登録することが直ちに刀剣類の所持を合法なものにするわけではない。

② 登録された刀剣の所持が適法なものとなるのは、法第三条第一項第四号の規定によって登録刀剣類の所持が合法なものとして認められているからである。

登録された刀剣の所持が適法なものとなるのは、法第三条第一項第四号の規定によって登録刀剣類の所持が合法なものとして認められているからである。刀剣類のうち、許可にかかるもの所持は「祭礼等の年中行事に用いる刀剣類その他の刀剣類で所持することが一般の風俗慣習上やむを得ないと認められる場合」に限って、例外的に許可されるが(昭和五十一年末で七二六五振許可)、これに反し、登録にかかるとは、発見拾得届をすれば大部分が登録されている現状であり、その数は百八十万振に達している。このような多数の刀剣類は、どういっわけで無条件に所持が許されているのであろうか。この点については立法の経過をみてみる必要があるようである。

一 登録の性格

銃砲刀剣類所持等取締法(以下法という)においては、法第三条第一項各号に定められている場合以外、何人に対しても銃砲刀剣類の所持を禁止している。法第三条第一項各号の内容は多様であるが、実務上は、おおね次の三つに大別される。

① 所持許可を受けた場合

② 法令に基づき職務上所持する場合等所持することに公共性があり、かつ、それが悪用されないことの保証がある場合

③ 登録を受けた場合

このうち前二者については当然のこととして理解されるが、「登録を受けた場合」については、割り切れない感じを持つ人が多い。行政上「登録」とは、特定の法律事実又は法律関係の存在を確認する行政行為であり、この場合は、美術品として価値のある刀剣であることを公の権威(登録審査員の鑑定結果)をもって確認する行為である。したがって、登録することが直ちに刀剣類の所持を合法なものにするわけではない。

二 登録制度の沿革

昭和二十年八月二十日連合軍最高司令官は、わが国の完全な武装解除と再軍備を禁止する趣旨の下に、一般命令第一号(九月二十日発効)をもって、「一般国民の所有するすべての武器を収集」、かつ、引渡すための準備をすべきことを指示した。ここにいう武器には、旧軍人が所有するものだけであ

三 登録制度の問題点

① 危険物としての捉え方

登録制度の発足の状況から推測する限りでは、占領政策としての武器回収を免れるために誕生したものであり、日本政府の意向として、危予防上刀剣類を規制しようとした動きは認められない。その後の変遷により、現在では、刀剣類の登録にあたって人的要件は全然問題にされないし、登録された刀剣は自由に売買できることになっているが、これらの点を捉えてみると、刀剣類が法上危険物として扱われていること自体が不思議なことと思えてくる。

② 発見届制度の運用

発見届制度は「爆発物取締罰則第七条」と同様に、銃砲刀剣類の安全に影響を与えるものを発見した者は、すみやかに治安維持の責任を有する警察官に届出させる趣旨によるものである。しかし現実には、審査に洩れた刀剣類の救済にこの制度が利用されてきたことは否めないところであり、法制定後の発見届状況は次表のとおりである。

③ 実態把握の困難性

法は、刀剣類を一応は危険物として捉えているので、教育委員会が登録した場合及び法第十七条に基づき譲受等の届出を受理した場合には、その旨を公安委員会に通知することになっている。これは刀剣類の動態を常時確実に把握しておくための手段として定められたものであるが、転々と自由売買され、また所持者自身の異動も激しい今日、特徴の少ない刀剣類の実態を掌握することは容易なことではない。現に、押収した刀剣についてその登録の有無を明らかにすることが不可能に近い状態になっており、再交付申請についても原本の発見に苦勞しているのが教育委員会の実態のようである。

* 刀剣類の登録制度には、以上のほかに問題が多いが、戦後三十年を経ただけに簡単に変更できる問題ではない。しかし、今後のこの制度のあり方を考えていくには、その実態と問題点をよく承知しておくことが必要であり、問題提起のつもりで筆をとったが、あくまでも私見にすぎないことをお断りする。

年	届出数	年	届出数
昭33	23,276	43	62,457
34	88,391	44	68,023
35	43,282	45	72,285
36	46,630	46	78,491
37	52,813	47	83,765
38	46,033	48	87,328
39	64,255	49	64,632
40	80,605	50	49,870
41	52,721	51	39,586
42	54,518		

文化財的価値を有する美術刀剣が戦後三十年を経た今日、なお毎年数万振も発見され、なお隠されている刀剣類が数十万に達するであろうという話を聞くと、何か空しさが感じられるとともに発見届には大きな矛盾が内包されていることを考えさせられる。

その一は、発見届により不法所持が合法化されるということである。前記の発見届されたもの大部分は戦後から不法所持されてきたものであろうが、何か理由をつけて発見届をすれば登録され、合法的所持になるという運用は、悪意のない不法所持には社会的制裁は不要であることを認めるものではないかということである。

これらのことから、発見届、登録制度は占領政策の後遺症といわれてもやむを得ないものがあるとも考えられる。

法は、刀剣類を一応は危険物として捉えているので、教育委員会が登録した場合及び法第十七条に基づき譲受等の届出を受理した場合には、その旨を公安委員会に通知することになっている。これは刀剣類の動態を常時確実に把握しておくための手段として定められたものであるが、転々と自由売買され、また所持者自身の異動も激しい今日、特徴の少ない刀剣類の実態を掌握することは容易なことではない。現に、押収した刀剣についてその登録の有無を明らかにすることが不可能に近い状態になっており、再交付申請についても原本の発見に苦勞しているのが教育委員会の実態のようである。

二千数百年前にさかのぼる現代のルーツ

『弥生人はどこから来たのか』

藤尾慎一郎著 定価(一七〇〇円+税) 吉川弘文館

皆さんは「弥生時代」をどのように記憶しておられるだろうか。弥生土器が使用され、稲作と鉄器が始まり、古墳が出現するまでのBC三世紀からAD三世紀ごろまでを指す、と私などもすっかり覚え込んでいた。しかし、今やそれは定説ではなくなつたのだ。

高校の日本史の教科書は令和五年、先史時代を中心に大きく改訂された。縄文時代は土器の出現を指標に約一万六千年前に、弥生時代は水田稲作の始まりを指標に約二千八百年前に開始期が引き上げられたのである。これにより、縄文時代は約三千五百年、弥生時代は約四百年ほど古く始まったことになる。なお

古墳時代への移行はほぼ従来通り三世紀中葉とされる。なぜこんなことになったのかというと、AMS-炭素一四年代測定法という自然科学の手法が導入されたのが主要因だが、古環境や弥生人のDNAについても酸素同位体比年輪年代法や核ゲノム分析といった自然科学と考古学との学際的研究によって、新たな事実が明らかにされたからだといふ。

平成十五年、国立歴史民俗博物館が放射性炭素年代測定により行った弥生土器付着の炭化物の測定結果を発表、その後の一連の研究によって精緻化され、ほぼ定説となった。その中心メンバーの一人が著者の藤尾さんである。

そのころ、藤尾さんとは「鉄の技術と歴史」研究フォーラムでしばしば一緒にいたが、従来の考古学の概念では捉え切れない最先端の取り組みに驚かされた。本書では、紀元前十一世紀に九州北東部や山陰に伝播したものの、補助的存在だった稲作が、紀元前十世紀後半に大規模に伝播して格差が顕著になるとともに、格差は子へと継承されて固定化してしまう格差社会、人口増加がもたらす環境破壊や結核などの疾病、まさに現代社会の縮図ともいえる社会が二千数百年前の利根川の西の地域に存在していたのである。」とあって、身につまされる。(十子民夫)



作 遺 此ノ刀於高砂吉原国家彩刃 小鍛冶義人誌之
紹 介 刀 銘 鍛義仁 令和六年一月吉日

全日本刀匠会会長や公益財団法人日本刀文化振興協会理事長を務め、当組合賛助会員でもあった吉原国家刀匠(本名在二)は昨年五月二十八日、七十八歳で逝去された。本刀は最後の作品である。

国家刀匠は闘病中もしばしば葛飾区高砂の兄・義人刀匠の鍛錬所を訪れ、鍛刀に取り組んでいた。たまたま焼き入れの公開を、一門関係者に懇願され、義人刀匠の弟子・羽岡義仁君の鍛えた平造り刀に土を置き、焼刃したのが本刀。くしくも最後の遺作となった。義人刀匠が銘を切り、終生の盟友・高岩



撮影/池田長正

NEWS & TOPICS 名古屋刀剣ワールド/名古屋刀剣博物館が開館



名古屋の剣博物館のエントランス

去る五月一日、名古屋市中区栄一「名古屋刀剣ワールド/名古屋刀剣博物館(名博・メーハク)」がオープンしました。

同館は日本の伝統工芸・伝統美術の保存・普及・発展、および名古屋市の観光活性化に貢献することを目的として設立された。

東建コーポレーション株式会社創業者の左右田鑑徳氏が収集した日本刀・甲冑武具を中心に、国宝・重要文化財指定品を含む約五〇〇

振の刀剣を所蔵。最大で刀剣二〇〇振、甲冑五〇領、浮世絵一五〇点、火縄銃・古式西洋銃三五〇挺の展示可能なスペースを擁し、デジタル機器によるアトラクションやインタラクティブ映像を導入し、目や耳で楽しめる体験型の展示も備えています。

刀剣の常設展示は各時代別や著名刀工、所蔵した武将ごとに分けて展示されており、同じく常設展示となる甲冑は多様性を示す多くの形式の作品が一堂に集められ、希少な重宝や国内の博物館では珍しい立ち上がった武者姿での展示のほか、兜、面頬、陣羽織などが種類ごとにまとめられてフロアに広々と展示されていた。

火縄銃を中心とした三六〇挺以上の銃砲コレクションは「火縄銃の生産地」「火縄銃の用途と砲術流派」「火縄銃に見る芸術」と並み、それぞれ生産地・種類・装飾というテーマに分けて実物を数多く、その違いが見比べてわかるように展示されていた。

江戸時代に作られた空気銃である「気砲」や、幕末に輸入された西洋銃、同時期に武器商人がセールス・サンプルとして日本に持ち込んだ大砲模型などの希少品もある。二門の大砲のうち一門は「源朝臣斉昭」と徳川斉昭の落款の入った水戸藩青銅砲で、斉昭の手蹟で「勇」の文字が入っていることから「勇」砲と呼ばれる。斉昭の命によって天保十三年から翌年にかけて製造された後、幕府に献上された七四門のうちの一門。もう一門は、馬関戦争の際に下関の砲台に配備された鉄製の洋式プロムフィールド砲で、重量約四五〇kgに及ぶ。

NEWS & TOPICS 「本作長義」と「山姥切国広」が足利と名古屋で同時展示



庄巻の刀剣展示風景

現在、世界的に評価の高まっている日本刀、甲冑武具、浮世絵や火縄銃がこれだけの質と量で展示されている様は、まさに圧巻であり、多くの来館者は驚きとともに鑑賞されていた。

同博物館のような世界に誇れる日本の武具に特化した施設が開館したことによって、内外の関心が高まり、私たちの業界にとっても大きな力になるであろうことはうれし

い限りです。

■名古屋刀剣博物館/名古屋刀剣ワールド 〒460-0008 愛知県名古屋市中区栄三三三ー一 開館/一〇時~一七時、月曜休館

足利市と公益財団法人徳川黎明会はこのほど、「山姥切国広」(足利市民文化財団所蔵、重要文化財)と「本作長義」(徳川美術館所蔵、同)を相互貸与し、それぞれが来年開催する展覧会で同時展示すると発表した。

足利市立美術館の特別展「山姥切国広展」で来年二月八日~三月二十三日、徳川美術館では特別展「時をかける名刀」(六月十四日~九月七日)の前期に当たる七月二十七日まで展示される。

両者による同時展示の企画名は「伯仲燦然(はくちゅうさんぜん)」。輝かしい二振の名刀が同時に展示されることを表している。

「本作長義」と「山姥切国広」は、その姿が非常に近いことから、本歌(本作長義)と写し(山姥切国広)であると伝わり、双方が今日まで現存しつつ、ともに重要文化財に指定されている唯一の存在である。



それを名譽とし、国広にその旨の銘文を刻ませ、また「本作長義」の写しとして作らせたのが「山姥切国広」だと考えられている。

頭長の所持からおよそ百年後、「本作長義」は尾張徳川家の所蔵となり今日まで名古屋に、「山姥切国広」は今年、作刀の地とされる足利市が購入し、継承されることとなった。

両刀の同時展示は、平成九年に東京国立博物館で開催された「日本のかたな」展以来二十八年ぶりとなる。

なお、両展覧会は株式会社「二トロボ」の「刀剣乱舞 ONLINE」とのコラボレーションで進められる。

催事情報

東京富士美術館

〒192-0016 東京都八王子市谷野町492-1 ☎042-691-4511
https://www.fujibi.or.jp/

特別展「サムライ・アート展 —刀剣・印籠・武具甲冑・武者絵・合戦絵—

刀剣や甲冑をはじめとする武器・武具類は、実戦で用いられるのと同時に、武威や家格を誇示する宝物として珍重され、鑑賞の対象とされました。優れた工芸技術と武家文化の隆盛を背景に、刀などの武器・武具は日本独自の発展を遂げ、今日では「サムライ・アート」とも称されます。現代に伝わる武士の遺愛の品は、消費され失われた実用品とは一線を画し、いずれも武士の美意識や匠のこだわりを反映しており、贅を尽くした逸品と言えます。また、歴史上の戦や軍記物語を題材とした合戦絵や武者絵には、武具甲冑を身に帯び、刀を振るって戦う侍の勇姿が澁刺と描かれています。

本展では当館の収蔵品を中心として、刀剣・刀装具・甲冑・兜などを一堂に展示するとともに、絵画資料に描かれた武士の姿を紹介し、「サムライ・アート」の魅力に迫ります。

会期：10月12日(土)～12月22日(日)



東広島市立美術館

〒739-0015 広島県東広島市西条栄町9-1 ☎082-430-7117
https://hhmoa.jp/next-exhibition/11128/

東広島市制施行50周年記念 「日本刀の美—大山住宗重と広島ゆかりの刀剣—

東広島ゆかりの刀鍛冶に大山住宗重と銘する刀工がいます。大山鍛冶は、建武年間頃（14世紀中頃）に筑前の左一派が大山（東広島市八本松町・広島市安芸区瀬野）に來住したと言われる、中世の芸州の刀工です。宗重は大山において室町時代中期から末期にかけて活躍し、数代続きましたが、現存する刀剣の数はわずかに限られています。本展は、所在が確認された宗重の刀剣15振を一堂に展示する初の機会となります。

また、鎌倉時代から江戸時代までの広島ゆかりの刀工による刀剣ならびに、県内で活躍する現代刀匠の作品や、全国的に知られる景光・虎徹・助広などの名工たちによる優れた刀剣のほか、鐔をはじめとする刀装具などを併せて紹介し、日本刀の繊細で力強く、華やかな美の世界に迫ります。

会期：10月15日(火)～12月1日(日)



日南町美術館

〒689-5212 鳥取県日野郡日南町霞785 ☎0859-77-1113
http://culture.town.nichinan.tottori.jp/nichinan-museum/entry33.html

特別展「印賀鋼の故郷から 日本刀の美～森井父子3人の仕事Ⅱ」

日本刀は古来より武器や権力の象徴、信仰の対象として、日本の歴史や文化に深く根つき存在してきました。現代では、およそ1000年にわたり受け継がれてきた製鉄や鍛錬、研磨など、その日本刀製作の技術が高く評価されるとともに、その固有の美しさから「鉄による最高の芸術品」として、世界に誇る日本の美術工芸品、文化財となっています。

ここ日南町は、豊富な山林資源と良質な砂鉄に恵まれて、日本古来の製鉄技術「たたら」で米え、日南町印賀の地で生産した玉鋼は、日本一の良質な鋼として「印賀鋼」の名は全国に知られました。

本展は、印賀鋼の故郷を誇る地で、日本刀の美と技の魅力に触れていただきます。米子市出身の刀職人親子、研師の森井徳訓氏と鐵太郎氏、鞘師の敦央氏の三人が手掛けた27点を展示します。

会期：10月11日(金)～11月10日(日)



東御市梅野記念絵画館

〒389-0406 長野県東御市八重原935-1 ☎0268-61-6161
https://www.umenokinen.com/exhibition/tomi-katana/

企画展「東御の刀鍛冶—繋ぐもの— 源清麿、山浦真雄、山浦兼虎、そして宮入法廣へ」

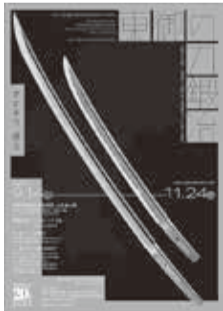
平成16年4月1日、小県郡東御町と北佐久郡北御牧村が合併して誕生した東御市は、今年度市発足20周年を迎え、この記念事業の一環として本企画展を開催する運びとなりました。

本展は、江戸末期に活躍した東御市滋野出身の山浦真雄・源清麿（山浦環）の山浦兄弟と真雄の子山浦兼虎、そして現在、東御市八重原に鍛錬場を構え作刀する宮入法廣氏ら東御市ゆかりの刀工をテーマとした企画展です。

山浦兄弟は小県郡赤岩村の名主（郷土）のもとに生まれました。真雄は実践に適した刀を求めて刀鍛冶を志します。江戸の氷心子秀世や、上田の河村三郎寿隆に師事し、9歳年下の弟清麿に作刀の手ほどきをしたと伝わります。真雄は後に松代藩真田幸貫に招かれ藩工となり、清麿は江戸の四谷で活躍したことから「四谷正宗」と称され江戸三作の一人に数えられています。

宮入法廣氏は人間国宝である隅谷正峯に師事し、平成22年に刀剣界で最高賞の「正宗賞」を受賞しました。現在も流派に縛られずに作刀を行っています。高円宮家の御守刀製作や、名刀「燭台切光忠」を再現するプロジェクトにも携わるなど、活躍の幅は多岐にわたります。企画展ではそれぞれの刀工にスポットを当て、その魅力と人気を探ります。

会期：9月14日(土)～11月24日(日)



会場によって休館日が異なります。事前に確認の上、お出かけください。現下の状況で入場制限や、観覧するには予約を必要とする場合もありますので、それぞれのホームページをご覧ください。

秋水美術館

〒930-0066 富山市千石町1丁目3-6 ☎076-425-5700
https://www.shusui-museum.jp/

日本刀物語Ⅱ

武士の時代において名刀は単に求めれば手に入るものではなく、所持者には刀に相応した「格」が求められました。ゆえに刀は人そのものを表し、「もののふの魂」となったのです。

本展覧会では、前期展示として「もののふの魂」と題し、日本の歴史に名を遺す武士ゆかりの名刀とともに、武士の美意識を象徴する甲冑や拵なども併せてご紹介します。1章「武将の愛刀」では、上杉謙信の指刀と伝わる一文字の刀や、豊臣秀吉が奉納した三条宗近の太刀、明智光秀の愛刀「明智近景」、伊達政宗が徳川家康から拝領したと伝わる郷義弘の名刀など、武将と名刀の物語をご紹介します。2章「天下三作と大名の宝刀」では、天下三作として世に珍重された正宗・吉光・郷義弘の名刀とともに、大名家が愛蔵した宝刀を併せて展示します。

後期展示は「名刀・美のひみつ」と題し、日本刀の鑑賞ポイントである「刃文」「地鉄」「姿」の三つの要素から、名刀の美について迫ります。切れ味を保つため必要不可欠である「刃文」、刀工の流派による個性が表れ、奥深い鉄の魅力を感じさせる「地鉄」、刀の反りや切先といった形状の美しさなど、名刀の持つ「姿」の美をご覧ください。

前期：9月13日(金)～12月1日(日) 後期：12月11日(水)～3月2日(日)



登米懐古館

〒987-0702 宮城県登米市登米町寺池桜小路72-6 ☎0220-52-3578
https://www.city.tome.miyagi.jp/bunkazai/toukenn.html

企画展「刀身はキャンバス」

日本で作られた鉄製の刀剣類のことを日本刀と呼び、今日まで多くの刀剣が受け継がれています。武器や権威の象徴として役割を果たし、現在では美術工芸品として国内外で高い評価を得ています。

今回の企画展では、宮城県美術刀剣保存協会様にご協力いただきながら、前期はさまざまな時代や地域の刀剣、後期は登米懐古館と登米市歴史博物館の刀剣を中心に展示します。

会期：9月14日(土)～11月17日(日)



島田美術館

〒860-0073 熊本市西区島崎4-5-28 ☎096-352-4597
https://www.shimada-museum.net/index.php

清正御用の刀鍛冶—同田貫展

肥後熊本の地で鍛えられた鉄の文化財、同田貫。同田貫は、室町時代末期の九州・肥後国に活躍した菊池延寿鍛冶から生まれた刀工一派。天正16年（1588）肥後入国を果たした加藤清正のお抱え刀工となり、玉名に鍛冶場を移して熊本城備刀を作った。文禄・慶長の役では朝鮮へも渡海し、かの地でも鍛刀した。のちに頑丈であり冴える物切れから「兜割」と称された同田貫は、清正の生きた時代雰囲気や今に伝えている。

今回の展示では、戦国の世に全盛期を迎えた古刀末期の同田貫を紹介。「折れず曲がらず」の実戦刀同田貫の迫力と魅力を堪能できる。

会期：10月2日(水)～12月22日(日)



三重県総合博物館

〒514-0061 三重県津市一身田上津部田3060 ☎059-228-2283
https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/MieMu/82591046496.htm

開館10周年記念・第38回企画展 「刀剣 三重の刀とその刀工」

刀剣は、かつて「武士の魂」とまで称され、武器としての役割はもちろん、日本の文化とも深く関わってきました。本展覧会では、三重を代表する刀工、桑名の千子村正の作品をはじめ、鍵屋の辻（伊賀市）の仇討ちで立ち回った荒木又右衛門の所用の刀など、三重ゆかりの刀剣59振を中心に、全69振の刀剣を展示します。刀剣の美と技術をご堪能ください。

プロローグ 映像/刀を作る
第1章 歴史に見る刀剣 第2章 三重の刀剣と刀工
第3章 三重にまつわる刀剣 第4章 拵（こしらえ）の美
エピローグ 技術の継承と刀剣の未来
会期：10月5日(土)～12月1日(日)



脇指 御勝山永貞

丸亀市立資料館

〒763-0025香川県丸亀市一番丁 ☎0877-22-5366
https://www.city.marugame.lg.jp/page/29179.html

企画展「ニッカリ青江公開展 かがやく日本刀の饗宴」

令和6年夏、丸亀城では、京極家ゆかりの歴史的建造物である延寿閣別館を宿泊施設とした城泊が始まりました。今回の展覧会は城泊を記念して、3年ぶりに京極家伝来の「ニッカリ青江」を公開するとともに、日本美術刀剣保存協会四国讃岐支部の協力のもと、さまざまな時や産地の名刀をはじめ、刀剣を彩った刀装具の名品を展示します。また、讃岐ゆかりの郷土刀や刀装具も展示し、讃岐で育まれた刀剣文化を併せてご紹介します。

会期：10月12日(土)～11月17日(日)

